

逸脱するキャラクター

2

ネット社会という船に乗って

世の中は、直線状ではなく、螺旋状に進化していると言えよう。一度、ヒットしたものが、廃れてしまった後、またヒットすることは様々なことで起こる。

小売のあり方も、パートメント型から専門店型へと交互にムーブメントがくる。

ビジネスモデルも垂直統合と水平統合、人事も、階層があるほうがいいのか、ないほうがいいのかと、議論が絶えない。

コンテンツも、同じだ。ムーブメントは繰り返す。

多くのビジネスマンは、数字を指標に、これらの社会の変化を予想する。しかし、僕は、コンテンツの変化から社会の変化を読み解くのが一番早いのではないかと思う。作家は、社会における「炭鉱のカナリア」と言われる。無意識の間に、変化を感じとり、作品の中にそれが紛れ込む。

たとえば、主人公だ。運命を受け入れる主人公と、運命に抗う主人公は、どちらがカッコいいか？

1999年の映画『マトリックス』は、主人公のネオが、初めは自分が世界の救世主だとは信じられない。しかし、試練をくぐり抜け、自分の運命を受け入れ、救世主としての覚悟を決めて、戦う運命を受け入れる姿がカッコいい。

一方、1997年の映画『ガタカ』は、主人公ヴィ

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

ンセントが、遺伝子によって人生が決められている社会で、遺伝子情報を偽装し、努力することで、運命を切り拓いていく。ほぼ同時期の映画で、象徴的な、運命を切り拓く主人公と受け入れる主人公がいるのが興味深い。

今までは、どちらもがカッコいい主人公として成立した。しかし、これからしばらくの間、運命に抗う主人公がカッコいい時期が続くのではないかと、僕は作家と打ち合わせしながら予想している。

社会は、どんどん情報管理社会になっている。例えば、今、自分が食べているものは、自分が選んだものなのか、情報によってAIが出してきたものによって選択させられているのか？

衣服、娯楽、住む場所と全てが、誰かに情報をコントロールされ、無意識のうちに選択させられているだけかもしれない。

我々は、自分の意思で何かを選択しているのか、それとも選択させられているのか？

自由意思というものの存在があやふやになっていく中で、決められたものを逸脱する力を持っているキャラクターが魅力的になっていくのではないか。

物語の世界は、現実では手に入れにくいものを手に入れている人が、カッコいいのだ。



Profile

株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形のあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。